

## 静岡強震

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長島, 昭 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00025149">https://doi.org/10.14945/00025149</a>

# 静岡強震

長島 昭\*

## 1. はじめに

静岡県を襲う地震には次の3つのものがある。<sup>(1)</sup>

①駿河湾の真中をほぼ南北に通る駿河トラフ～南海トラフ沿いのフィリピン海のプレートユーラシアプレートの境界で起きる地震(1944年の東南海地震 M7.9 など)と相模湾にある相模トラフ沿いのフィリピン海プレートと北米プレートの境界で起きる地震(1923年の関東大地震 M7.9 など)があり、駿河湾トラフでは東南海地震によって「ひずみエネルギー」の一部が放出されたが、残りのエネルギーが「東海地震」となって放出されると考えられている。

②駿河トラフから陸側のユーラシアプレートの下に沈み込んだフィリピン海プレートが変形して破壊して起きる M6 クラスの地震で、1841年、1917年、1935年、1960年に起きている。

③伊豆半島は1974年には「石廊崎断層」が活動して「伊豆半島沖地震」が、1978年には「稲取断層」が活動して「伊豆大島近海地震」が起きている。伊豆半島の東岸には北西-南東の圧縮力が働いているので、この力で断層のずれが起これ、地震が発生している。1930年の「北伊豆地震」や1978年、1990年の「伊豆大島近海地震」、1980年の「伊豆半島東方沖地震」などはこの力によって起きた。

これらの地震の中、静岡県中部に住む者にとっては、②の地震に関心がある。そのうち、静岡清水両市に大きな被害を与えた1935年の静岡強震についての情報が少ないことから、当時の報告などから以下のようにまとめてみた。

## 2. 被害の概要

この地震で静岡市の大谷地区が大きな被害を被ったので地元では「大谷の地震」とも呼んでいる。その惨状について現地踏査した沼津測候所の倉重彦一技手は、次のように書いている。<sup>(2)</sup>

「久能街道の高松橋を南に越えると、がぜん被害が目につく。真っ直ぐな家は1軒もない。みな一斉によろけている。傾いた方向は東北東である。交番の丁字路を東に折れると、西大谷に入るが、この角、図1のA点からB点に至る300mの間は実に悲惨で、全潰れの家がほとんど軒並みである。交番の並びの北側には約10軒の家が将棋倒しとなっている。2軒置いて同じ側に二階家が3軒あり、1階は転びかけて「く」の字になり、南方に曲がり出ている。その南側の二階家は1階が押し潰され、2階は道路に前屈みに落ち掛けている。その北側、丁度郵便局との筋向かいの土蔵造りの大きい家は東北東に倒れ、壁土を振るい落とされて骨をさらしている。この大梁の下で、ここの妻女は押し潰されたとのことである。身体は深く壁土の中に埋まっていたと、主人は暗然として語っていた。この南側の藁屋根の家は東北東に傾いて、障子は菱形にひずみ、紙はビリビリに裂けている。もまれ方が如

\*静岡市中田一丁目4-5-1103

何に激しかったかを物語っている。

郵便局の西側には地震で倒壊すると一緒に火事が起こった。幸い1軒丈ですんだ。溝泥を撒き散らした様な火事場の黒こげとなった布団が水に膨れ上がって積んである。郵便局も東北東によろけ出している。その東側の二階家が3軒、1階はペチャンコとなり、2階の縁が道路の上に乗っている。この階下からよくも逃れる事ができたものだ。案の定、ここで死者が1人出ている。この辺の人の話ではゴーと音がしたと思うと、忽ちぐらぐらときて2階が平らになってしまったとのことである。郵便局から東へ100mで古庄街道との交差点に達する。(中略)この角から突然被害が少ない。少なくとも転んだ家が見えなくなる。勿論、家は傾いているが。(中略)それから95mへだたったカーブの所から再び壊家が見え始める(図1のCで示した位置)。壊れて小屋組丈が地面に乗っている様だ。その屋根を破った梁の下敷きとなったヒシャゲタ箱をこじ開けて中の品物を出している人たちがいる。見ると品物は幾つかの紙袋に入った子供の洋服である。今日からお盆ではないか。電柱には「お盆日延べ」という貼紙が出ている。(中略)東大谷の東電

出張所の東側の家は形もない位に壊れて仕舞っている。出張所も前のめりになって、階下のガラス障子は皆中央から折れているが、ガラスはひびも入っていない。南側も満足な家は1軒もない崩壊と転び掛けの家とで雑然としている、くすぶった古い家である。露な、すすけた小屋組の下でまっ黒な家具が、仏壇が、押しひしゃげている。陰惨である。この激甚区域も西平松との境界から画然として軽くなって傾いた家も疎となる(同図D)。カーブからこの所まで300mである。つまり高松以東の約400mと東大谷以東300mの2つの激甚区域との間に比較的軽度の100mほどの距離がはさまっている。一寸面白い現象である。(中略)高松の丁字路(同図A)から西へ400m、大谷川(同図E)を渡って宮竹に入ると、突然被害が少なくなり、家々がやや傾いたのが散見する程度となる。……」(漢字や仮名遣いは新しいものに変更してある)

以上のように静岡市内では現在の大谷川河口付近の高松から東大谷の間が大きな被害を受けました。

静岡強震は昭和10年(1935)7月1日午後5時25分、北緯35°、東経138.4°の深さ6

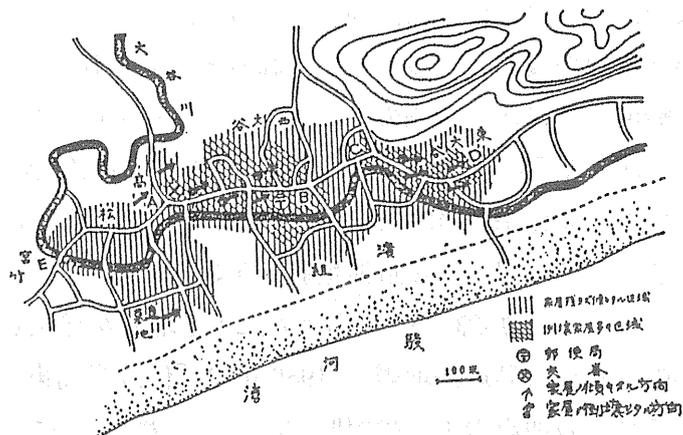
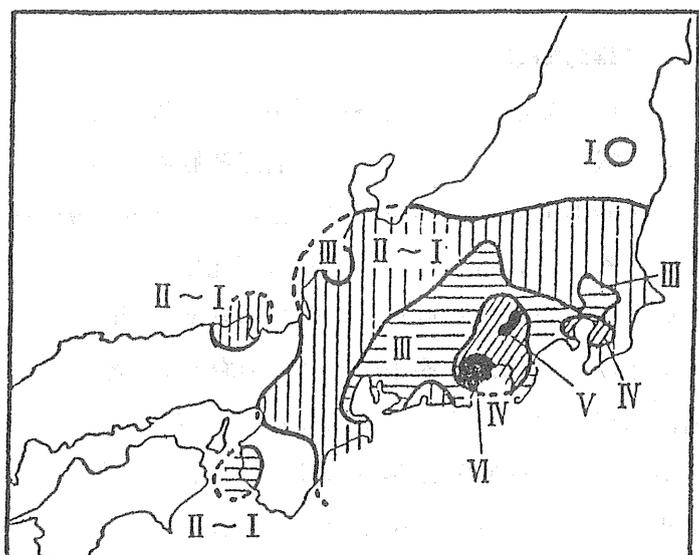


図1 被害激甚区域



- |            |             |           |
|------------|-------------|-----------|
| I 微震       | III 強震(強き方) | V 強震(強き方) |
| II 弱震(弱き方) | IV 強震(弱き方)  | VI 烈震     |

図2 静岡強震震度分布図

～7 km を震源として起きた M6.4 の地震で震度分布は図2 のようである。この地震による静岡県中部地区の被害は次の表1 のようである。

この表によれば、静岡市、清水市など2市10村(当時)で死者9人、負傷者299人、住家全壊363棟、半壊1,830棟、非住家451棟、半壊1,247棟と道路、清水港などの被害が出た。

表1 静岡強震被害概表  
(1935年7月15日正午現在：内務省警保局調べ)

区分 郡市町村別	人		世帯		家屋(棟数)		損害見積価格 円	
	死	傷	全壊	半壊	区別	全壊		半壊
静岡市 (安倍郡) 有度村	8	218	207	1548	住家	237	1412	1,056,505
					非住家	372	1042	350,335
		8	73	151	住家	73	151	57,704
					非住家	47	97	19,235
清水市 (庵原郡) 袖師村	1	68	69	313	住家	53	263	145,974
					非住家	28	103	282,591
				1	住家		1	200
					非住家			
飯山村					住家			
					非住家	2	2	300
庵原村					住家			
					非住家	1		10
高部村				1	住家		1	150
					非住家	1	1	150
西奈村		1		5	住家		2	300
					非住家		1	100
西河内村 (志太郡) 広幡村		1		1	住家			
					非住家		1	20
東益津村		2			住家			
					非住家			
岡部村		1			住家			
					非住家			
合計	9	299	439	2020	住家	363	1830	1,260,833
					非住家	451	1247	652,741
					計	814	3077	1,913,574
備考	1. 外に静岡市に家屋全焼1, 半焼2、損害17,500円、面積139坪。 2. 道路、橋梁、港湾その他の損害莫大なる見込							

(注)その後の市町村合併で、有度村は静岡市と清水市に分割され、袖師村、飯田村、高部村、西河内村は清水市に、西奈村は静岡市に、広幡村は藤枝市に、東益津村は焼津市に合併、岡部村は岡部町になった。

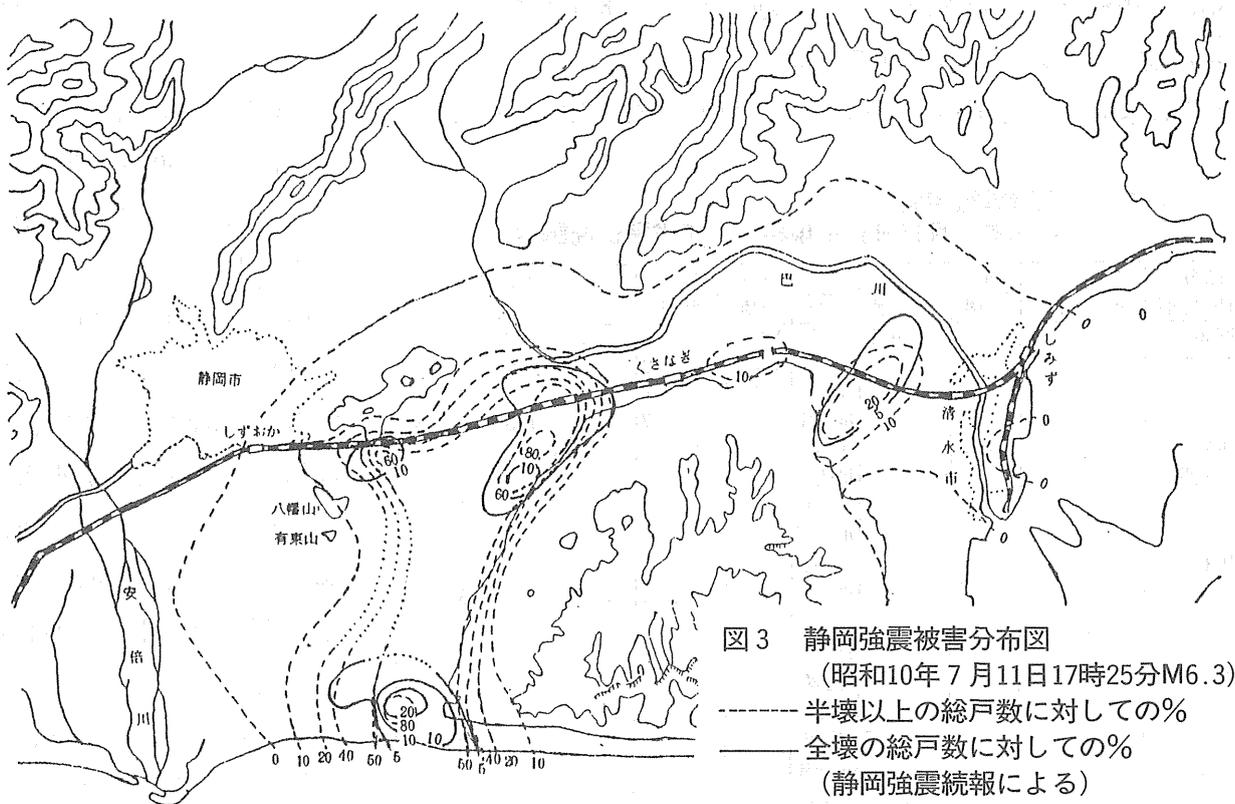
これらの被害は静岡、清水両市とその中間部地域を含む長さ12～13 km、幅7～8 kmの狭い範囲に限られ、しかもこの地域内でも被害分布はかなり不規則であった。この様子は図3に示されている。この図によれば、被害の大きかったところは先の踏査記にあった高松・大谷地区を

はじめ、池田・小鹿地区、谷津山の南の曲金地区、清水市の渋川・有東坂地区などであることが分かる。各地域の被害については後で詳しく述べることにする。なお、有度山の西方で破線が点線に変わっているのは、その地域には家が存在していないので推定したものである。

清水港は昭和5年の北伊豆地震(M7.3)大被害を受け改修された以外の岸壁が大きく破損した。(4)

### 3. 静岡市内の被害

高松、西大谷、東大谷などでは死者4人、負傷者35人、全壊79戸、半壊166戸、全半焼3戸(全戸数377戸)という被害が出た。高松では115戸のうち、35戸が全壊、60戸が半壊で、被害率(全壊+半壊/総戸数)は81.7%で、死者1人、負傷者6人が出た。西大谷では132戸のうち、全壊28戸、半壊47戸で被害率は56.8%で、火災も発生して2人が死、13人が負傷した。東大谷では130戸のうち、全壊17戸、半壊55戸で被害率は55.4%で、死者1人、負傷者16人を出した。当時、大谷川は南下してきた流れを高松の集落の北で西に変え、宮竹との境で南下して砂丘に当たり、東に向きを変えて高



松、西大谷、東大谷の3つの集落の中を流れて西平松で海に注いでいた。(図1)大きな被害を受けたこれらの集落の大谷川と海の間集落(南岸の方が北岸より1~3 m高い)では、外見上、家屋は少し傾き、瓦の脱落も少なく、川より海に近付くほど、家屋の損傷は軽くなっていた。しかし、南岸でも小墓石が20個ばかり全部北に倒れていた。亀裂(地割れ)はこの辺の道路傍に各所に見られたが、久能街道には交通が盛んなため、その跡が認められた。最も著しい亀裂は、東大谷の大谷川南岸の道路の川岸より1 m位離れて小亀裂が300 mほど連なっていた。また、高松方面の南岸の川縁の同様な所にも小亀裂が見られた。この付近は街道より北方に行く小道あるいは街道に並行な小道の表面にも小亀裂があった。高松橋付近には道路上に亀裂があり、方向は南南東-北北東で長さ60 m、幅最大30 cmだった。

有度山の西麓にある大谷、小鹿、池田、北麓にある聖一色、栗原、国吉田、栗原の北に接している古庄、長沼、池田の西にある曲金、東若松町なども相当な被害に被った。大谷八坂神社では手洗い屋根が東側へ倒壊し、石灯籠は全部東方へ倒れた。大谷の大正寺では本堂前の石灯籠2基が東16°北、東22°北に投げ出されており、この寺の裏の墓石は大半は同様な方向に倒れ、まれに南西(南30°西位)に倒れたものもあり、回転したものは反時計廻り(左廻り)だった。転倒率は8割程度と推定される。大正寺の西の大谷小学校では、校舎(東西に長い棟)の玄関が破壊され、窓ガラスもかなり割れていた。この小学校の前の東西の道路に並行な亀裂があり、また、大谷の町に通じる南北の道路にも亀裂がかなりあった。皆道路を造ったときの盛り土、その他の地形的影響によって生じたと思われる。

伊庄では道路上に2本の亀裂があり、宮川では家屋が傾きが目立ち道路傍の高さ1 m位の石垣(セメントで固着したもの)は下から3分の2位の所に水平の亀裂ができていた。石塀やレンガ塀は全部

傾き、倒れたものが数カ所あった。宮川より大谷間の道路より西へ15m位のイモ畑(10坪=33m<sup>2</sup>位)の中間に亀裂があり、南北に1m8、幅6cm位だった。宮川から静岡-高松道路へ連絡する西南西に走る小道を200m程行った所の灌漑用の小川(水無し、幅1m位、ほぼ北北西に位置している)の両側のコンクリートの護岸壁(厚さ15cm、高さ2~3m)の西側のものは異常はなかったが、東側のものは西側に倒れていた。亀裂は小川の傍路上によく現れ、大きいものでは幅60cm位だ。地元の人によればこれより西へ300m位の大谷川の川辺にも亀裂は相当できているとのことだ。

片山では潰れた家があり、大部分の家は東方へ傾き、堀ノ内でも大部分の家が東方に傾いてた。

小鹿、池田、聖一色は相当の被害があり、一見して傾いた家が多く、屋根の瓦が落ちたり、瓦の破損が目立った。小鹿の竜雲寺の石塔は全部東方に倒れ、石塔が東方へ6.9cm移動した。また、レンガ塀が倒れて子供が3人死傷した。池田の青竜山本覚寺では山門の脇に建てた2m8の門柱が東方に倒

表2 静岡市の町内別被害

地域	全壊	半壊	総損	全壊/総戸数	半壊/総戸数	地域	全壊	半壊	総戸数	全壊/総戸数	半壊/総戸数
高松	34	60	115	23.6%	81.7%	森下3	0	13	148	0	8.8
西大谷	28	47	132	21.2	56.8	旭町	0	9	76	0	11.8
東大谷	17	55	130	13.1	55.4	南町1	0	2	216	0	0.9
西平松	1	24	138	0.7	18.2	南町2	0	6	219	0	2.7
中平松	1	4	64	1.6	7.8	八幡7	1	0	68	1.5	1.5
古宿	0	1	60	0	1.7	有東	0	8	91	0	8.8
安居	0	1	82	0	1.2	稲川2	0	4	444	0	0.9
根古屋	0	1	96	0	1.0	中田	0	5	198	0	1.5
宮竹	3	37	84	3.6	47.6	中野	0	1	21	0	4.8
敷地	6	45	120	5.0	42.5	沓谷	0	17	408	0	4.2
下島	1	6	69	1.5	10.2	銭座	0	1	174	0	0.6
大谷	0	39	73	0	53.4	千代田	0	3	155	0	1.9
小鹿	6	85	171	3.5	53.2	上土	0	16	103	0	5.8
池田	20	87	134	14.9	79.9	川合	0	10	213	0	4.7
聖一色	5	56	73	6.9	83.6	瀬名川	0	7	105	0	6.7
栗原	5	41	60	8.3	76.7	鷹匠町①	0	2	300	0	0.7
国吉田	10	52	111	9.0	55.9	伝馬町	0	1	322	0	0.3
中吉田	0	5	189	0	2.6	院内町	0	1	136	0	0.7
谷田	0	4	169	0	2.3	日出町	0	2	147	0	1.4
古庄	5	44	90	5.6	54.4						
長沼	9	39	224	4.0	21.4						
東柚木	0	5	89	0	5.6						
曲金1	6	12	107	5.6	16.5						
曲金2	0	9	51	0	17.6						
曲金3	1	16	66	1.5	25.8						
曲金4	0	10	52	0	19.2						
曲金5	1	25	26	3.9	100.0						
豊原町	0	53	111	0	47.7						
東若松町①	0	12	62	0	19.4						
東若松町②	0	18	67	0	26.9						
東若松町③	0	16	61	0	26.2						
小黒1	1	0	51	2.0	2.0						
小黒2	1	3	55	1.8	7.3						
小黒3	4	4	56	7.2	14.3						
小黒4	0	3	60	0	5.0						
森下1	0	14	118	0	11.9						
森下2	0	12	322	0	3.7						

表3 静岡市の人的被害

地域	死者	負傷	地域	死者	負傷
紺屋町	2	1	小黒1		1
鷹匠町3		4	東若松1		2
伝馬町		6	東若松2		1
院内町		3	東若松3		1
音羽町		6	曲金1		1
春日町		4	曲金4		1
豊原町		2	曲金5		1
森下1		2	馬淵本町		8
森下2		1	中田		3
森下3		3	下島		1
南町1		3	高松	1	6
南町2		1	西大谷	2	13
旭町		1	東大谷	1	16
稲川2		1	小鹿	2	4
八幡7		3			

れ、本堂の前の石灯籠は2基北東方向に倒れ、墓石の大部分は南東に倒れ、東または北東に倒れたものも少なくなかった。時計廻りに30°程回転したものもあった。池田では住家1戸、非住家24戸が倒壊し、死者2人（1人は負傷30時間後に死亡）、重傷2人、軽傷2人であった。ここでは「地鳴り」を聞いた人がいた。聖一色では住家、非住家の大破したものは全戸数の4割位で、円福寺の石塔の7割位（建て直したものの大半あり）は東北東ないし東方に倒れていた。

栗原、国吉田ではほとんどの家が傾き、障子紙は著しく破れ、古庄では巴川の支流の後久川畔につぶれた家があり、古庄、長沼では沿道の家は皆、清水方向に傾いていた。

この地震で静岡市内で死者8人、負傷者218人、住家全壊237棟、半壊1,412棟、非住家全壊372棟、半壊1,042棟の被害が出たが、市街地では死者2人（紺屋町で石塀の倒壊で）、負傷者60余人を出したに過ぎなかった。

図4は有度山西麓付近の被害の大きかった地域を含む地図とその地域の総戸数に対する被害率（全壊+半壊）と総戸数に対する全壊の率を示したものである。最も大きな被害を出した高松、西大谷、東大谷から東または西に離れるに従って全半壊の率は急速に減るが、有度山の麓伝いに北に行っても全半壊の率は大谷から国吉田までと古庄が50%を超えており、中でも聖一色(83.6%)、池田(79.9%)、栗原(76.6%)は高松に次ぐ被害である。

次に上記地域より西の地域を見ると、谷津山の南の柚ノ木の静岡放送局（現東海短大のある所）の玄関は3cm沈下し、壁に亀裂が入り、静岡電鉄曲金停留所（現静鉄春日町駅）付近の静清国道（国道1号線）のコンクリート・ジョイント（方向はほぼ南東-北西）に沿って破壊した。音羽町では負傷者が6人出た。日出町では2戸半壊した。

曲金の静岡農学校（現静岡地方気象台の所）は銃器室は東北東に傾き、校舎の屋根瓦は著しく落ちた。曲金5丁目では町内26戸全部が全半壊し、豊原町でも約半数の家が半壊した。

東若松町の東洋モスリン工場の食堂（幅6間=約11m、長さ=約72m）が南側に倒れ、1人が負傷した。事務室の金庫の東北東に向いたもの2個のうち、1個は前方（東北東）に走り出して台より落ち、他の1個は東北東に倒れかかり、辛うじて止まっていた。南南東向きの戸棚は倒れなかった。

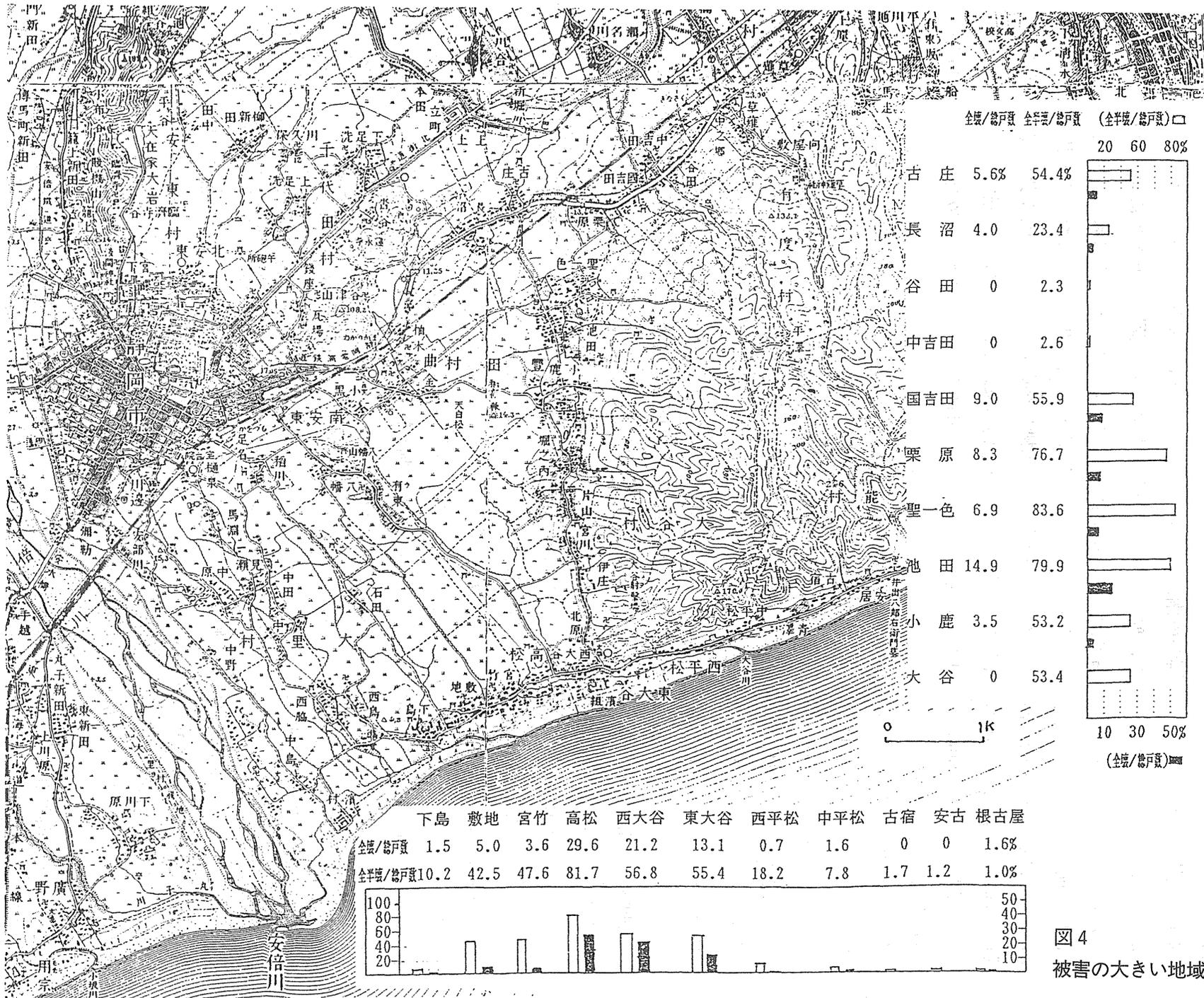
西隣の黒付付近には傾いた家があちこち見られた。森下では家が倒れ、2丁目のレンガ工場が倒壊し、レンガ製の煙突の上部3m程が折れて東へ落ちた。また、森下や南町では水道管が破損して漏水した。八幡神社では石灯籠3基が東へ、3基が北へ倒れた。境内の地面に割れ目ができ、その方向は北北東。神社の前の鳥居の笠木は北より南方にわずかに回転した。中田の神社の石灯籠が倒れた。

下島の路傍の小高地の小社は西南西に墜落し、敷地の小社の石灯籠が倒れた。

市内の中心部では駿府城の内堀と外堀の石垣が共に数カ所崩れ、城内の知事公舎などの石塀が倒壊、水落町、紺屋町ではそのため死者を出した。

県庁前の石垣が十数mにわたって地震でひずみ、午後10時ごろ崩壊した。県庁の正門のレンガ造りの門柱は2本とも上部が折損して危険なため、取り除かれた。警察署の横の方でレンガ塀が崩壊した。静岡駅近くの倉庫で大破したものがあつた。駅西方の宝台院のレンガ塀が北北東に倒れた。小梳神社では壁に亀裂が入り、石灯籠2基が東北東にないし北東に倒壊した。

浅間神社では石灯籠が2基倒壊し、後の山の所々に南南東～北北東に亀裂ができ、本殿裏の石垣が



崩壊した。臨濟寺では墓石の倒壊が少しあり、瓦も少し落ちた。

本通3丁目の交差点のレンガ塀が南南西側に倒れた。用宗では軽傷者4人あり、そのうち、大崩の崖崩れによる者2人、地震で屋外に飛び出し竿に当たった者1人、荷物の下敷きになった者1人。

有度山南麓の東大谷の東麓の西平松では、家が傾き、障子がひずみのために破れ、背後の山地は随所に小山崩れし、そのためにイチゴ栽培の石垣が大きく崩れた所が2カ所あった。大谷川の河口（当時）の北に当たる中平松の怡泉寺は本堂の壁が落ち、水槽は移動し、外見上、内部共に相当な被害を受け、本堂前の広場（一部盛り土）は亀裂が多く、同寺裏の墓地では8割以上は転倒し、そうでないものは甚だしくずれて回転し、甚だしいものは180°回転、即ち裏向きとなった。安居の井出八郎右衛門の墓石も大部分倒れた。

久能山東照宮、久能山登り口の家々には被害らしいものは殆ど認められないが、登り口の右手の寺の古い朱門が右に傾き、門内の石灯籠は2基共東微北方向に転倒。石段にはなんらの被害はなかったが、ただ上に近い所の石垣が5cm程ずれていた。頂上の神社の建物にはなんらの損傷もないようである。ただ社前の石灯籠数10基のうち、数基を残して皆倒壊した。

久能山から日本平へ至る道路は有度山が大崩壊して不通となった。日本平の南側は恰も鋭利な刃物で削り取ったように崩れ落ちて谷底を埋め、樹木は根こぎされ、赤肌を現して、屏風を立てたようになり、崖の縁には亀裂が所々にできていたという。この旅館で当時の状況を聞くと、最初にゴーという地鳴りが聞こえたと思う間もなく、激しく揺れて家諸共突き上げられた、という。気がついて見ると、あたりは禿げ山になっていたという。有度山の谷間にある平沢（戸数は8）では障子紙も破れない程度の揺れで、谷田から平沢までの谷に沿う道路に5カ所小さな亀裂が道路に並行してあった。平沢西方の鞍部には分水嶺に並行した著しい地割があつて左右の谷底に向かって鞍部の表土がやや滑っていた。また、ここの緩傾斜の原形面が平沢川に削り取られた崖にも多くの地割があつた（図5 A点）。この鞍部から沢沿いに南西

に下がる尾根の一部（同図C点）にも小亀裂があつた。池田から切り込んだ谷の両側には可成り著しい山崩（D、E）が2ヶ所あり、Dは大きく、丘の頂から谷底まで高さ60m、幅100m位の馬蹄形をしている。頂上付近の割れ目の最大幅は30cmで茶畑の畦はずれて食い違い、ずれの最大は60cmに及んでいた。小鹿からの谷に沿う



図5 崖崩・地割

図中F点に高さ15m、幅10m位の馬蹄形の崩れが2カ所、ここから南の鞍部に切り込む谷に沿う図中G点に数個の亀裂と崖崩があつた。（未完）

#### 主な参考文献

- 1) 静岡県沼津測候所（1935）：調査報告第3号 『静岡強震報告』 静岡県沼津測候所
- 2) 静岡県沼津測候所（1935）：調査報告第4号 『静岡強震続報』 静岡県沼津測候所
- 3) 中央气象台（1935）：『静岡強震調査概報』 中央气象台
- 4) 門村浩・田村俊和（1971）：「静岡地域における既往の地震災害」 『静岡県地震対策基礎調査報告・静岡・清水地域』 静岡県